伏見城立売通町屋跡

発掘調査現地説明会資料

1999年8月28日

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

伏見城立売通町屋跡発掘調査

場　　所　　京都市伏見区桃山町立売1-6
期　　間　　1999年5月13日～継続中
調査面積　　約970㎡

調査経過

当調査は、仮称桃山特別養護老人ホームの建設工事に伴う発掘調査である。調査は、今年2月に試掘調査を行い、遺構の残存状況が良好であることを確認した。そのため本調査を5月より開始し、継続中である。

調査地は、伏見城下の南側にあたり、現在までに安土・桃山時代～江戸時代の町屋数棟と立売通の路面、それに伴う北側側溝を検出した。

歴史的環境

城下町としての歴史は、天正20年（1592）豊臣秀吉が、指月の丘に隠居屋敷の建設を指示したことに始まる。

この指月城は、当初隠居屋敷として計画されたが、その後、淀城から天守・矢倉（櫓）などを移築し指月城として普請しなおされた。しかし、文禄5年（慶長元年・1596）閏7月13日に起きた大地震（慶長大地震）のために倒壊した。秀吉は、直ちに新しい城の普請のために指月城の東北にあたる木幡山に伏見城の築城を指示した。

この伏見城は関ヶ原の戦の直前に、石田三成方に攻められ落城・焼亡してしまった。その後伏見城は徳川家康によって再建されたが、家光の時に完全に破却された。

豊臣秀吉は、城の築城とともに城下町の建設にも力を注いだ。秀吉の城下町は、兵農分離が徹底され、中世以来の伏見九郷の農民は全て城下町の外に移されてしまった。また、神社・仏閣も例外ではなかった。ここに武士と商人・職人だけが住む新しい都市・城下町が出現した。この町は古絵図によると、城の西側・北側・南側に武家屋敷を配置し、その西側に町屋が配されている。そのまた西側にも武家屋敷が並ぶ。（写真４）

一方徳川家康は、秀吉とは違い城下町の中に神社・仏閣の建設を許すなど、人心の掌握に努めた。

秀吉は、築城に際し物資の搬入路確保のため、淀堤・槙島堤を築堤して宇治川の流れを北側に変更し、御船入りを完成させた。巨椋池の南北に小倉堤を築堤し、豊後橋を架設して大和街道を城下町までつなぐなど交通路の掌握をはかったと考えられる。

その後も伏見の町は、宇治・淀川水路に角倉了以により開削された高瀬川（慶長16～19年）が加わり、水運業でにぎわった。

検出した遺構

第１面（18～19世紀）　現代盛土・旧耕土の下で、立売通の路面・北側の側溝・畑とそれに伴う溝・井戸などを検出した。

第２面（17～18世紀）　立売通の路面と、その北側側溝・数棟の町屋跡を検出した。

町屋は、土間と床貼り部分とに分かれており、土間部分でカマドを検出した。その他町屋に付属する施設として、井戸・排水施設（溝・汚水溜）などを検出した。

町屋部分で地震のさいの噴砂の跡を検出した。この部分では５～10cm位の段差（断層）が出来ており、大きな地震だったことが予想される。

第３面（17世紀初）　立売通の路面と北側の側溝・町屋６棟と町屋に付属して井戸・カマドなどを検出した。

側溝南壁に護岸施設か、橋のような施設があったようで柱穴が並んで検出された。

町屋は第２面と同様に、土間と床貼りの部分からなっている。土間は、「通り庭」と呼ばれ家の奥までのびる長いものである。土間の奥でカマドや井戸などを検出した。カマドは３基検出し、建物３では、2基のカマドが並んでいた。

これらの町屋は、火災にあっている。この火災は慶長10年（1605）、武家屋敷から出火した火が立売町一帯までも焼き尽くすほどの大火であったことが『鹿苑日録』にも記されている。

出土遺物

土器類　明染（碗・皿）・備前（甕・擂り鉢）・信楽（擂り鉢）・丹波（擂り鉢）
　　唐津（碗・皿）・土師器（皿）

瓦　類　金箔瓦（桐文）・軒丸瓦（巴文・違鷹羽文・その他）・軒平瓦（唐草文）
　　丸瓦・平瓦・小型瓦（小菊文）・鬼瓦の一部・桟瓦

銭　貨　宋銭・寛永通寶

その他　銅製品

調査成果

今回の調査によって江戸時代初め頃には、すでに立売通に面して町屋が軒を連ねていたことがわかった。また、立売通の路面は何層にも重ねられており、修復が必要になるほど人や物の往来が頻繁であったことがうかがえる。

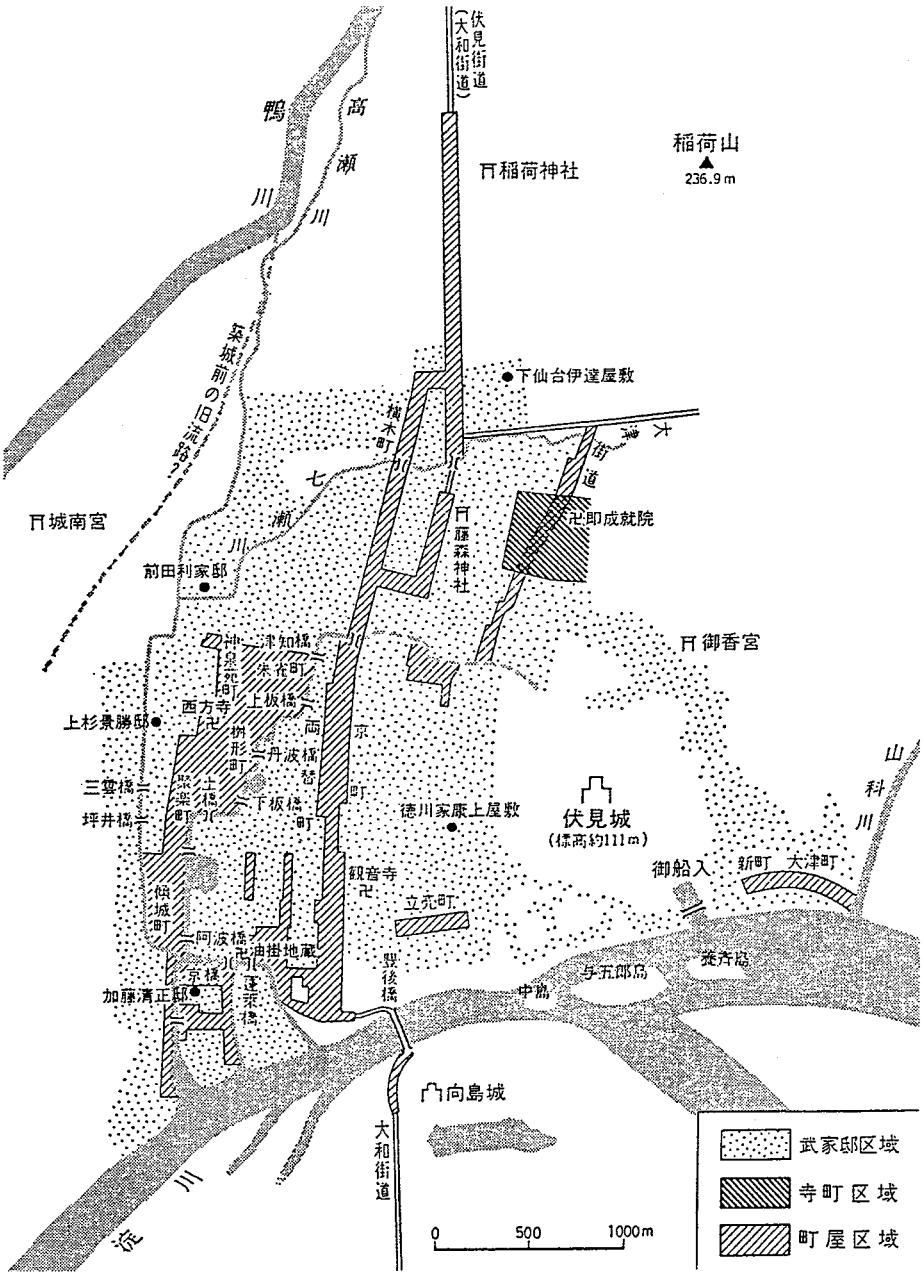
立売通は、伏見城西半部の町割りの方位とは少しずれが生じており、一番最初の伏見城である指月城の町割りがそのまま残った可能性が考えられる。

立売通は、伏見城下町の始まりとともに宇治川に面した舟入及び、奈良街道から伏見城下町への進入路の一つとしてにぎわいをみせる。伏見城廃城後も立売通の町屋は存続するが、19世紀には耕作地へと変わっていった状況が、検出した遺構からよくわかった。

また地震・火災など幾多の災害に見舞われながらも、そのたびに建て替えや修復を繰り返していたことも遺構の様子から確認できた。噴砂を伴う地震の跡は、規模が大きかったと予想される。層序の関係からみると慶長10年（1605）の火災の後、17世紀の整地層との間に地割れが起きていることから寛文２年（1662）の地震に相当すると思われる。

なお第２トレンチで、自然地形の落ち込みを検出した。ここが町境と考えられることから、町屋の規模は、立売通北側側溝から南北約30mであったと推定できる。

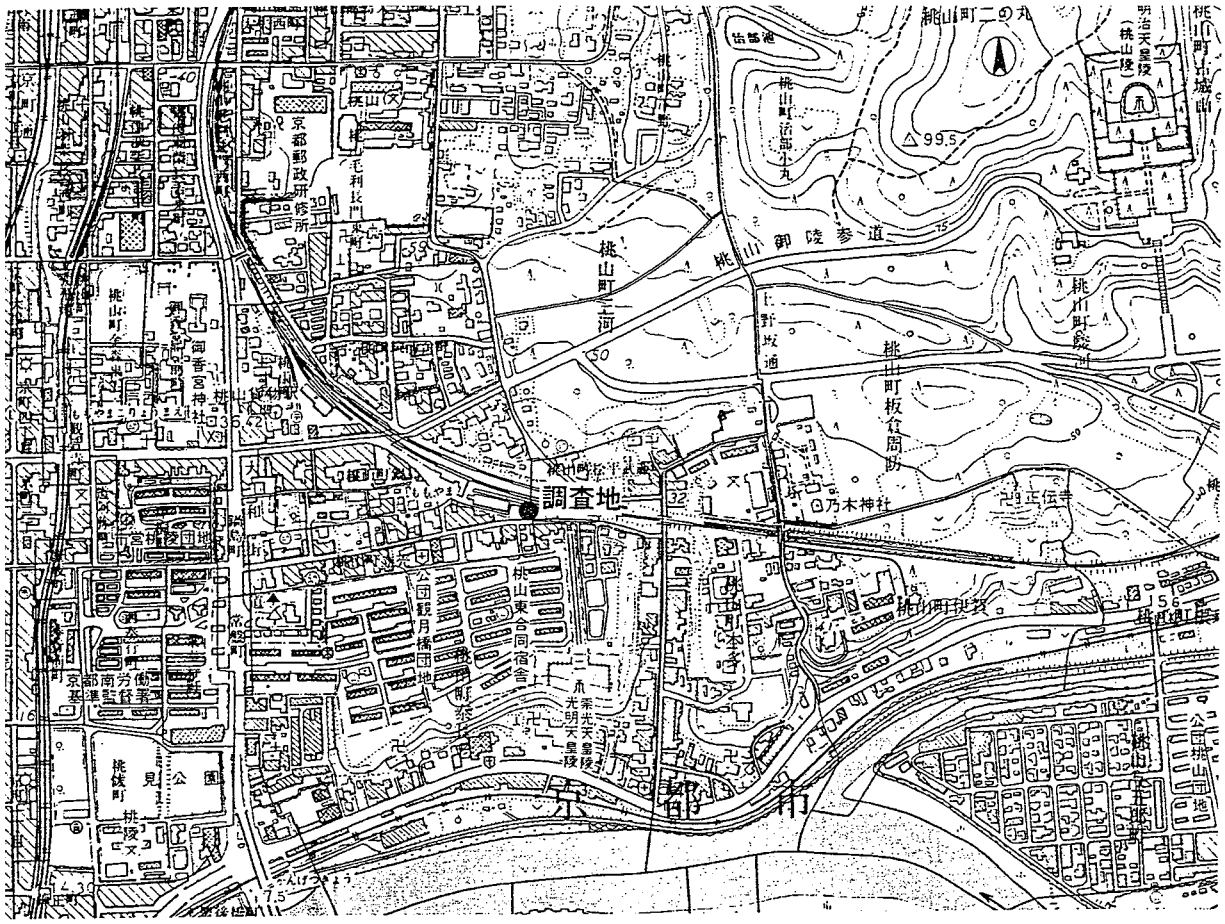
今回の調査の結果、近世の町屋の単位や、建物の構造・規模などを一部分ではあるが明らかにすることができた。これは今後、伏見城下町を復原する一助になりうる大きな成果であった。



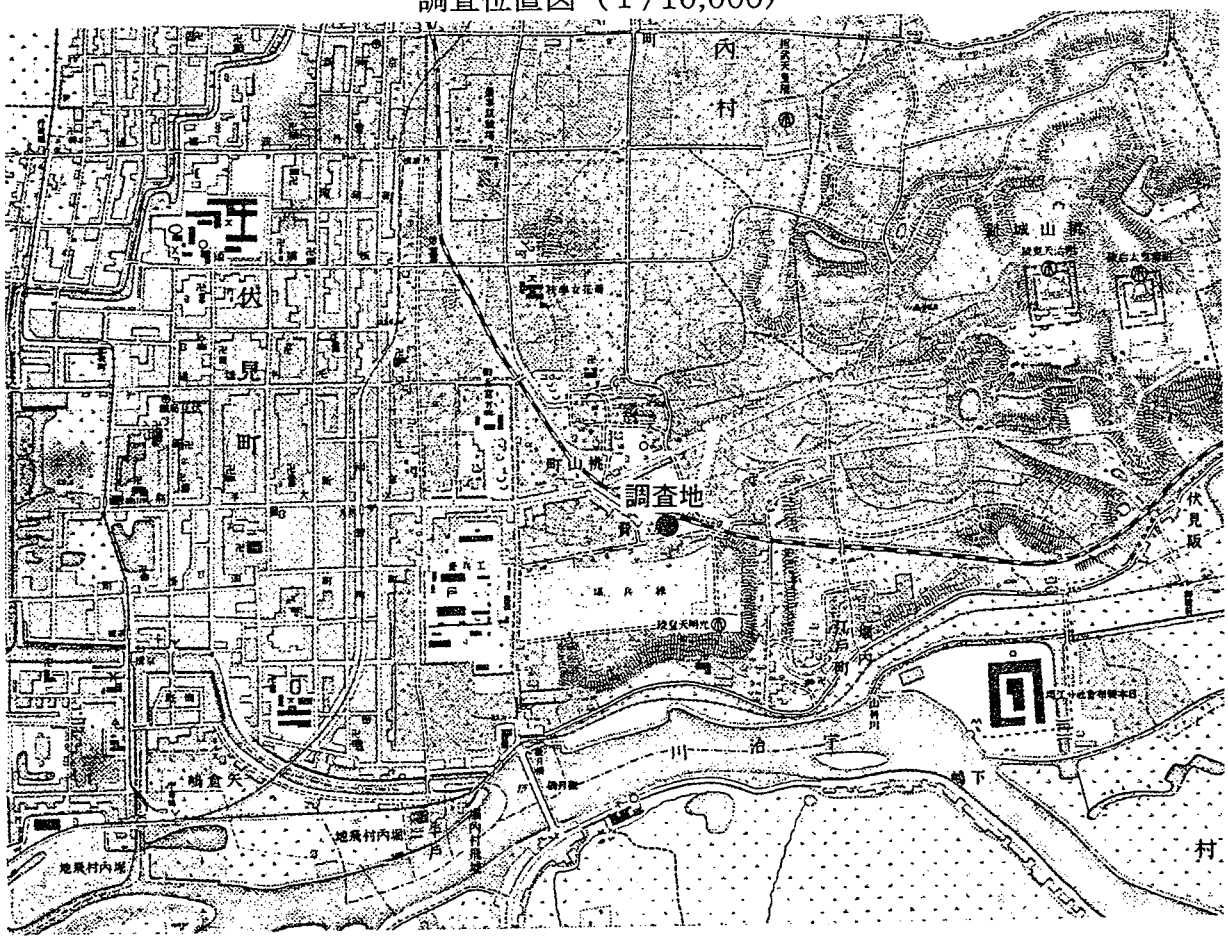
伏見城下町復原図（中島至氏復原　『京都の歴史４』より）

伏見関係略年表

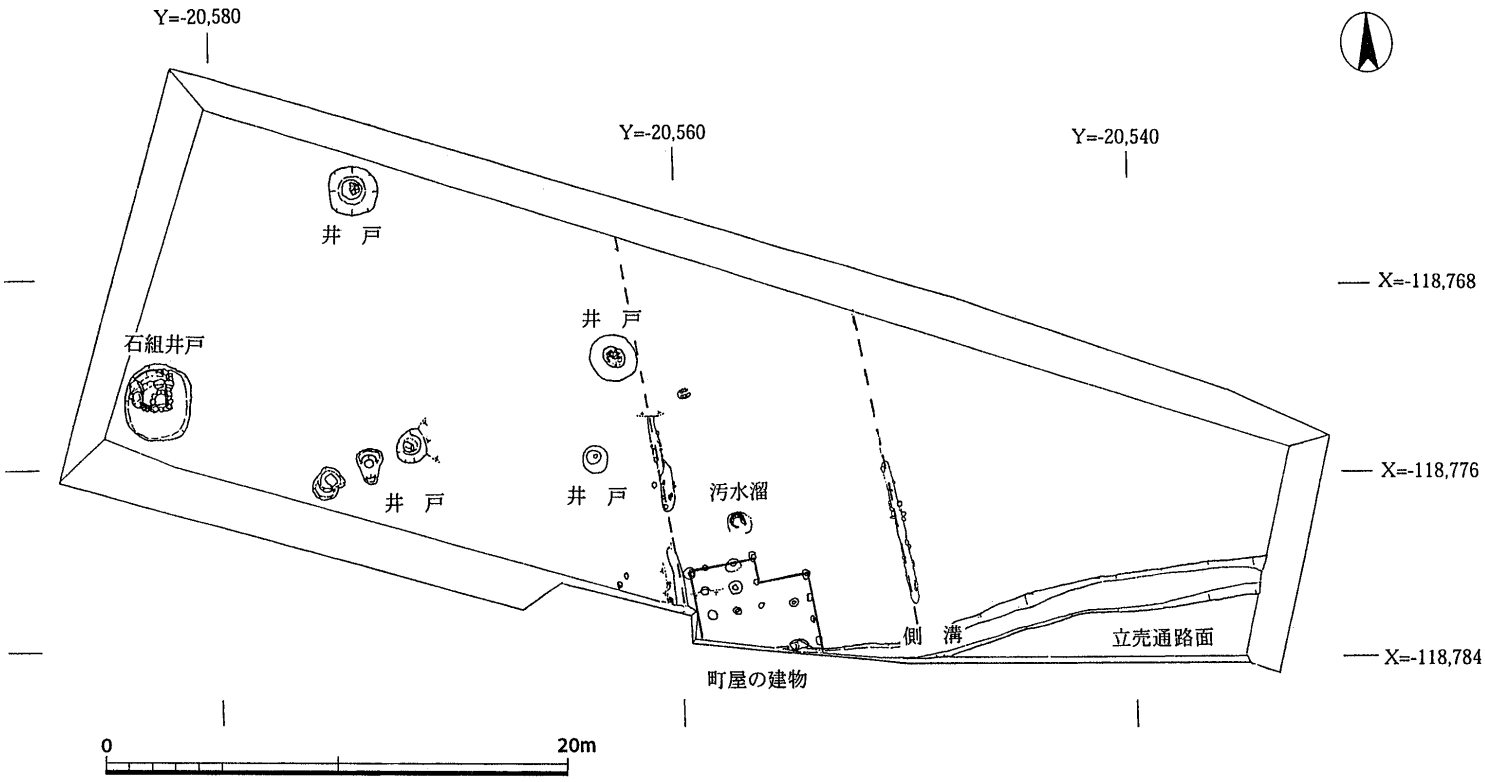
年　号	西暦	記　事	文　献
寛治7年12月24日	1093	橘俊綱の臥見亭焼亡	中右記
文治2年正月19日	1186	後白河法皇、伏見御所に渡御	玉葉
応永8年7月4日	1402	伏見殿焼亡	迎陽記
天正10年6月2日	1582	本能寺の変	多聞院日記
天正11年8月	1583	羽柴秀吉、大坂城造営開始	
天正14年2月21日	1586	豊臣秀吉、聚楽第造営開始	言経卿記
天正19年	1591	秀吉、御土居を築く	信尹公記
天正20年8月20日	1592	秀吉、伏見指月に新城の造営を始める	兼見卿記
文禄2年閏9月20日	1593	秀吉、伏見城に移り、諸将近辺に第館を設け始める	光代記
文禄3年3月18日	1594	淀城天守と矢倉、伏見城に移築	駒井日記
文禄3年10月	1594	前田利家、秀吉の命により宇治川に槙島堤を築く	村井重頼覚書
文禄3年	1594	伏見城下町造成のため社寺村落の移転	
文禄4年7月8日	1595	秀次官職を奪われ高野山へ、秀次自害	言経卿記
文禄4年7月28日	1595	聚楽第破却、伏見城に移築	燈心文庫所蔵文書
文禄5年閏7月13日	1596	大地震のため伏見城倒壊	義演准后日記
文禄5年閏7月14日	1596	秀吉、伏見木幡山で伏見城再建にかかる	義演准后日記
文禄5年10月10日	1596	新伏見城（木幡山）の本丸完成	当代記
慶長2年5月4日	1597	伏見城の天守閣完成、秀吉と秀頼大坂城から移る	義演准后日記
慶長3年8月18日	1598	秀吉、伏見城で死去	当代記
慶長5年8月1日	1600	伏見城陥落、鳥居元忠自害	義演准后日記
慶長5年9月15日	1600	関ヶ原の戦い、東軍が西軍を破る	義演准后日記
慶長6年3月23日	1601	徳川家康、伏見城に入る	当代記
慶長7年6月1日	1602	伏見城の普請始まる	当代記
慶長8年2月12日	1603	徳川家康、伏見城で征夷大将軍の宣旨	徳川実記
慶長10年12月26日	1605	伏見立売町焼亡	鹿苑日録
元和5年8月	1620	伏見城の破却決定	徳川実記
寛永9年	1632	伏見奉行所、小堀遠州によって富田信濃守屋敷に移転	雨中之鑵子
寛文2年5月1日	1662	大地震により、被害甚大　余震七日に及ぶ	玉露叢
慶応4年1月3日	1868	鳥羽伏見の戦い	
大正元年8月6日	1912	明治天皇陵が伏見桃山の地に決定	
昭和39年3月20日	1964	伏見桃山城天守を鉄筋コンクリートで遊園地内に復原	



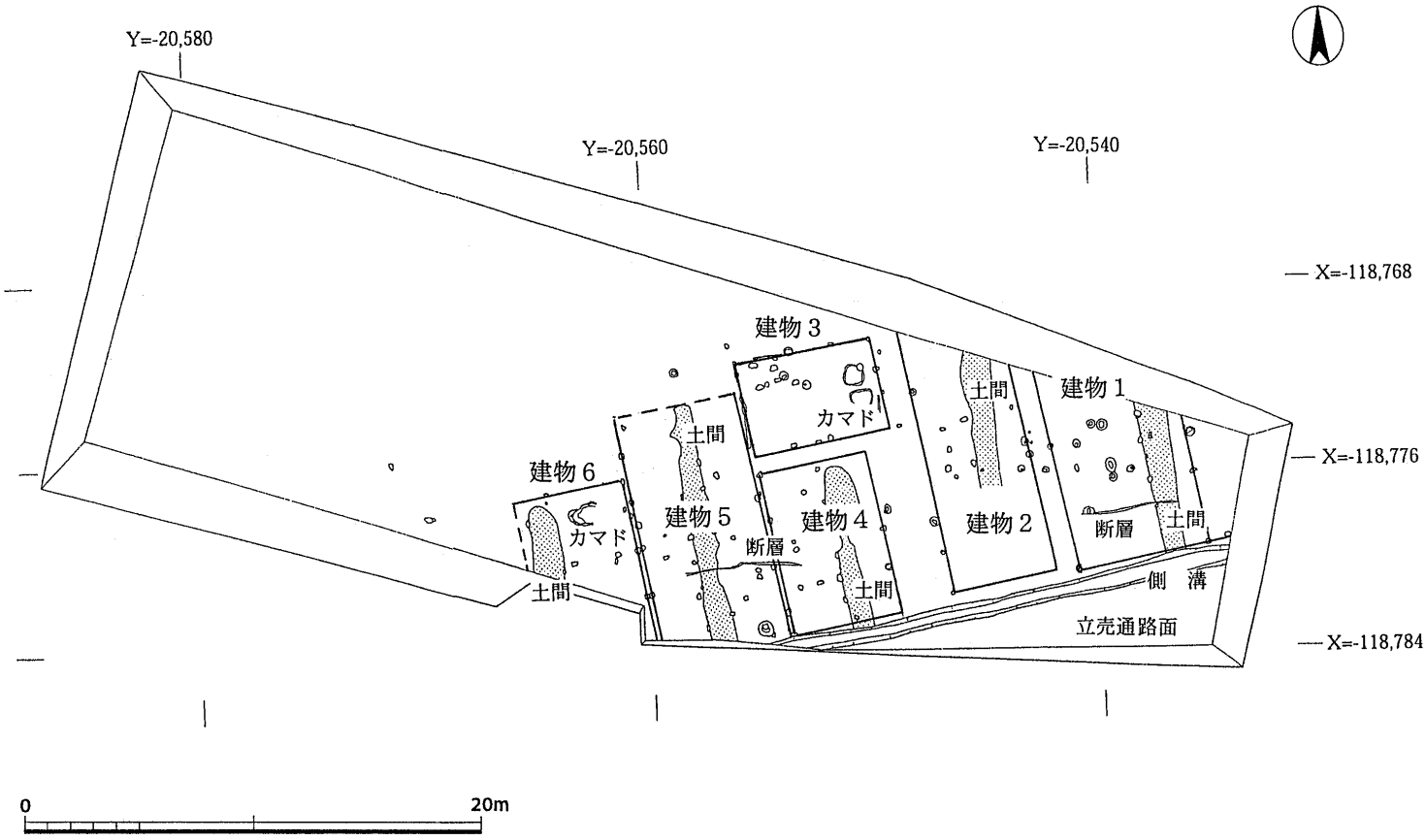
調査位置図（1/10,000）



調査位置図（大正４年）



第２面　遺構配置図



第３面　遺構配置図

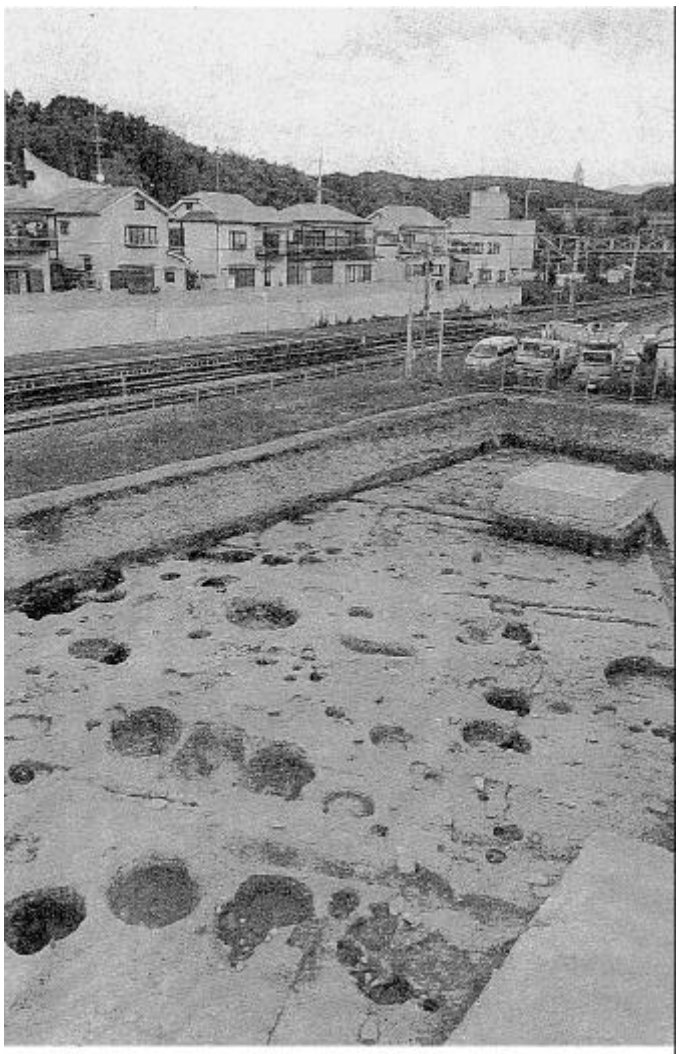


写真１　調査区全景（西から）

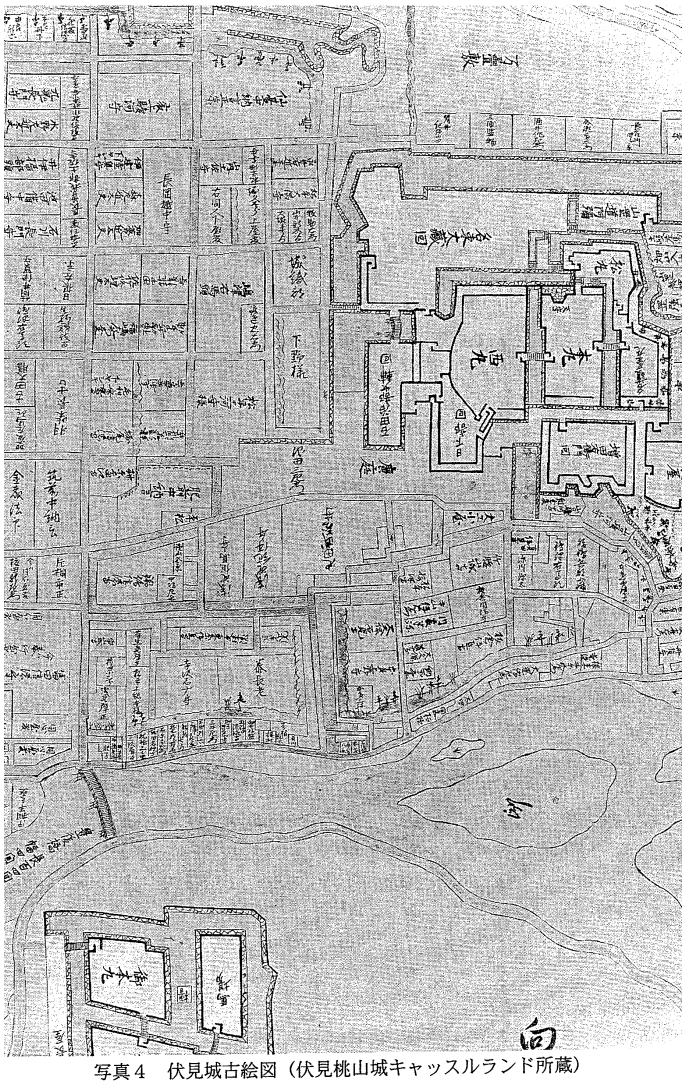
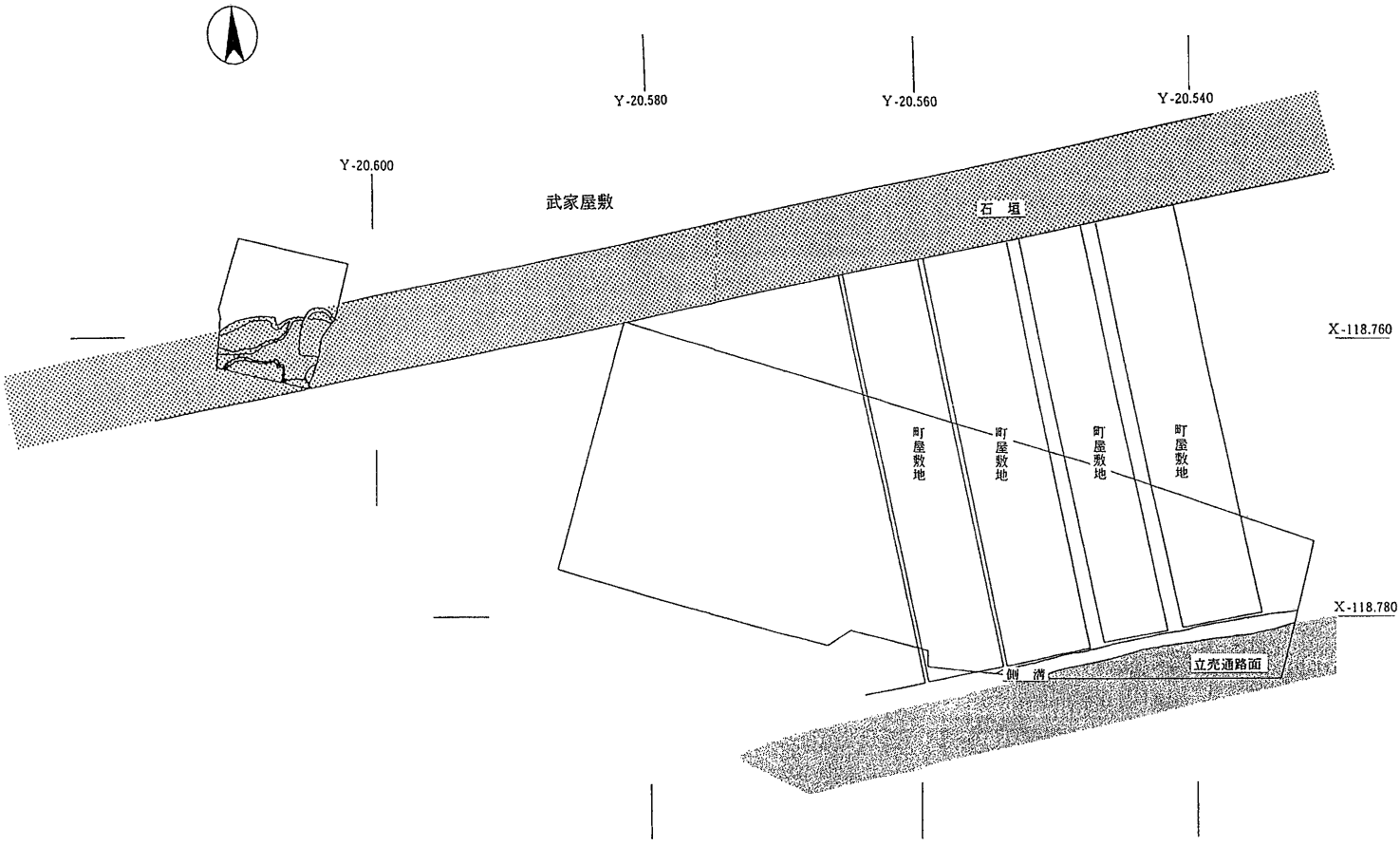


写真４　伏見城古絵図（伏見桃山城キャッスルランド所蔵）



立売町町割り模式図

0　20m

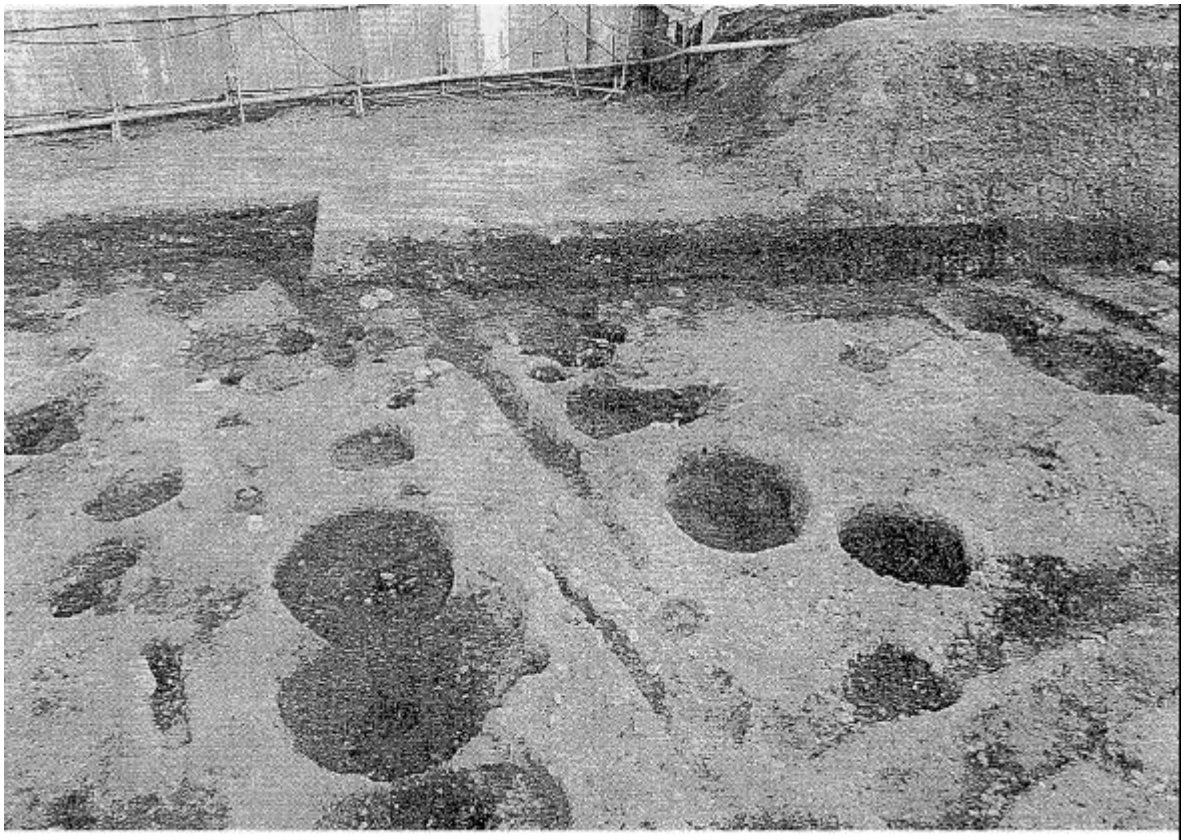


写真２　建物跡細部（北から）

写真３　建物跡細部（北から）